

243 発達障害児をもつ母親の育児支援について

松下美奈子, 田原弘幸, 鶴崎俊哉

長崎大学医学部保健学科

key words 育児感・社会的支援・疲労感

【目的】

障害児をもつ母親の育児についての研究は、心理的・身体的負担やストレスなどのネガティブな面をテーマとしたものが多い。しかし、子どもの成長を通して得られる喜びや感動、育児への励みなどのポジティブな面もある。このように育児感には様々な要因と関連している。本研究では母親のもつポジティブな育児感と社会的支援、疲労感との関わりについて検討した。

【対象と方法】

N県の知的障害児通園施設に通園している2から6歳の発達障害児をもつ母親20名を対象に、平成16年9から10月に自記式アンケートを実施した。調査は留め置き調査で1ヶ月以内に回収した。有効回答者17名(85.0%)、平均年齢35.4±5.2歳であった。

調査項目は育児感と社会的支援、疲労感である。育児感については、大日向の母親役割の受容と子どもに対する感情10項目および加藤らの育児ストレス尺度から肯定項目7項目を使用し、各項目を4段階で得点化した。社会的支援については、宗像の支援ネットワーク尺度の手段的支援5項目と情緒的支援7項目を2段階で得点化した。疲労感については、林の疲労度診断から緊張感5項目、負担感3項目、不安定感5項目、多忙感5項目を使用し、各項目を5段階で得点化した。

統計的手法は、Spearmanの順位検定とMann-WhitneyのU検定を用い、有意性の検定は5%水準で行った。

【結果】

1) 育児感と社会的支援、疲労感との関連

育児感と社会的支援との間では有意な関連は認められなかった。[育児感全体]の高まりは[負担感]の低下、[不安定感]の低下と、[母親役割の受容と子どもに対する感情]の高まりは[負担感]の低下と、[育児に対するストレス]の低下は[疲労感全体]の低下、[負担感]の低下、[不安定感]の低下と関連した。

2) 育児感の高いグループと低いグループ間における社会的支援、疲労感の差

社会的支援では、高・低グループ間で有意差は認められなかった。[育児感全体]が高いグループでは[負担感]の低下と、また[母親役割の受容と子どもに対する感情]が高いグループでは[負担感]の低下と関連した。

【考察】

社会的支援が育児に大きな役割をはたしている報告は多いが、本調査の結果では、育児感と社会的支援と有意な関連を示さなかった。このことは、育児感や社会的支援の得点の分布をみたときに、多くの対象者が高得点に分布しており、社会的支援の必要性が低かったためと考える。

育児感と疲労度尺度の負担感・不安定感と有意な関連を示した。このことは、通園施設の利用により、(1) 母親自身の時間をもつことで子育てを振り返ることや自分を客観的にみる余裕ができる、(2) 他の母親との交流を通して他の子育てや援助の情報交換ができることなどから母親の心理的不安の軽減をもたらすと考えられる。このようなことが、母親の育児の悩みや不安によって起こる負担感や不安定感の低下、結果として育児感を高めたと推測される。

■ 神経系理学療法 1

244 鏡治療が非利き手での心的および実際の課題遂行時間に及ぼす影響

— 健常中高年者を対象として —

平岡範人¹⁾, 菊池佳世¹⁾, 阪梨さやか¹⁾, 手塚康貴¹⁾, 藤原求美¹⁾, 松尾 篤²⁾

1) 生長会府中病院理学療法室, 2) 畿央大学健康科学部理学療法学科

key words 鏡治療・運動イメージ・心的時間測定

【目的】脳卒中患者の運動回復を最適にするため、運動イメージの使用が注目されている。運動の錯覚的視覚フィードバックを与える鏡治療は、視覚的イメージに関連し、Ramachandranらの報告にて片麻痺患者のリハビリテーションで有用とある。運動イメージを顕在化する為にDecetyらは、心的時間測定(mental chronometry)を用いている。鏡治療と心的時間測定を用いた松尾らの先行研究では、中高年者での評価は行っていない。そこで今回我々は、健常中高年者の非利き手での書字課題を用いて、実際、あるいは心的な課題遂行時間の比率と鏡治療の影響を評価した。

【方法】健常中高年者26名(男性10名、女性16名、全て右利き)、平均年齢59±5.6歳(52-69歳)を対象とした。介入として被験者に鏡治療を実施し、鏡治療前後での非利き手における実際、あるいは心的な課題遂行時間測定を行った。課題内容は、非利き手で「理学療法」の4文字を実際、あるいは心的に書字することとした。測定はデジタル式ストップウォッチを用い、実際の課題遂行時間は、ペンを紙にふれたところから最後に離れるまでとし、それを検者が測定した。心的な課題遂行時間は、開始から終了までを被験者自身が行った。鏡治療は作成した鏡箱を用いて実施し、非利き手を鏡の背面に置き、利き手の鏡像が錯覚で非利き手の運動として視覚入力されるように設定した。鏡治療は10分間施行し、鏡背面での非利き手の運動は全く行わなかった。測定結果の解析には、鏡治療前後における各課題遂行時間をpaired t-testを用いて分析し、心的課題遂行時間に対する実際課題遂行時間比率(以下心的/実際)も算出した。

【結果】1. 実際の書字課題遂行時間は、鏡治療前と比較し、鏡治療後において有意に短縮した。(p=0.004)

2. 心的な書字課題遂行時間は、鏡治療前後において有意な差(短縮例18名、遅延例8名)を認めなかった。(p=0.162)

3. 心的/実際は、鏡治療前0.68±0.36、鏡治療後0.69±0.30と有意な差は認めなかった。(p=0.953)

【考察】中高年者による実際の課題遂行時間は鏡治療により有意な減少を示した。このことは、若年者を用いた松尾らの先行研究と一致し、中高年者においても鏡治療の有効性を示している。しかし、心的な課題遂行時間に変化を認めなかった理由として、心的/実際が治療前より0.68であったことから、中高年者では、若年者に比べ運動イメージ生成に正確性を欠く状態であったと推測される。自身の能力を過大評価することなく正確に、明確な運動イメージを形成、維持し続けることの重要性が示唆された。